

開発と河川の相互関係

近世、江戸時代は、日本全国で耕地開発が進展し、自然環境を大きく変貌させてきた。「新田開発」と言われる耕地開発の展開過程の研究は、文献史学や歴史地理学の諸分野で多くの蓄積を上げている。

しかし、耕地開発に見られる荒廃や再開、又は自然環境の変動という視点から考察した例は少ない。

17～19世紀の耕地開発を、長期気候変動のなかで変化した河川環境を意識し、開発と河川の相互関係を明らかにすることを試みた。

この手法において歴史学・歴史地理学・自然地理学の各分野の分析手段を援用しながら、特に前近代文献資料（近世文書）と近世絵図を解読し、二次資料化を図った。絵図の解読・分析から得られた結果を、近代的促両性花である地図類や空中写真と照合し、耕地開発の復元を試みた。

河川環境変動の検討が可能なフィールドとして、関東造盆地運動の影響をうけた関東平野中央部の利根川流域を選定した。また、関東・南東北地域の耕地開発研究は開発条件・開発主体を視点とした環境地理学的視点の考察を行った。

今回は、16世紀後期から17世紀前期にわたる約100年間の利根川本流の河道変遷と、それに連動した諸河川の河道改編の時期を資料類の解読によって分析。先行研究を整理しつつ、結果を提示した。

先行する利根川研究の中で、庄内古川（新川）の1546年（天文15年）の開発を河道改変から、この河道と正保城絵図 下総国世喜宿絵図に描かれる「利根古川」との関連を述べる。古利根川の1574年（天正2）と1596年（慶長元）の2回の締切り考察に加える。

講義は、別添資料による河道変遷経過をたどり。

続いて、天明2年の浅間山噴火による河道変更

18世紀の享保改革期の新田開発政策に関東で手腕を発揮した井澤弥惣兵衛が関与した開発と河川かんきょうの改編。井澤の開発の特色は、用水源であった内陸湖沼を干拓する代わりに新たな水源を河川から取得する代用水の設置など。

つづいて、関東造盆地地域の用水で利根川を取水源とする葛西用水の構築、整備、改編過程を河道変遷や自然環境変化の視点から説明。葛西用水の整備は2段階に分けられることなど。前期葛西用水は、17世紀の初頭、中島用水と葛西井堀の二つの用水の結合して整備され、しかし、1704年（宝永元）の利根川の水害で中島用水が江戸川からの取水が不可能になったことから、1704年（享保4）、新しい取水口を羽生領の用水である幸手用水に転換して、中島用水を分離し、利根川右岸の本川俣（羽生市）から取水する後期葛西用水が成立。しかし18世紀以降の利根川では、水害が頻発することになり、葛西用水にも影響を

与えた。19.世紀前期、葛飾郡の葛西用水区域は、江戸川から用水を取水する新たな「加用水」を設置し、用水の確保と耕地の維持を図った。小地域で完結できなくなった用水体系がさらに大地域の結合へと拡大し、結合・変化していく過程には、利根川の河道改編や水害が大きく影響した。

最後に、東日本大震災に係る液状化現象についてコメントされ、

まとめ、現在に継続する関東平野の形成は歴史時代に入った 6000 年前の縄文海進から形成された平野である。関東平野を取り巻く火山を源流とする利根川水系は、自然災害と密接なかかわりを持ってきた。1783 年の天明浅間山噴火で発生した天明泥流は、近代に至るまで利根川治水の課題となった。そして、東日本大震災は「土地の履歴」を改めて私たちに立証した災害と言える。「自然の想定外はない」ことを再認識し、全国の被災地への思いと復興へのまなざしを持ち続けたいと、「自然に想定外はありません」、と結んだ。